

第三節 近代ムエタイの誕生

第一項 ムエカッチュアクからグローブへ

National Culture Commission (1997) は、次のように述べている。

「1923 年から 1929 年にかけてムエタイ場は改正された。スワンクラブカレッジよりももっと大きなラックムアン・ターチャンススタジアムというムエタイ場が作られた。この頃、ムエタイの試合は、ムエカッチュアクからグローブへの変更の時期であった。ムエカッチュアクでは人が亡くなる場合もあったからだ。ジアという選手が亡くなった事件から、関係者はムエタイの試合にグローブを用いるように義務づけた。」⁷⁹

「1935 年ムエタイをする人達は、慈善事業としてタイの軍隊のために興行した。これ以降ムエタイは、さらに人気が出るようになり、頻繁に行われるようになった。プロモーターは、巨大な興行収入を得るようになる。この頃に試合場で賭けをする人が増えたのでラーマ 8 世の勅令で初めて賭けについて 1935 年に法律ができた。」⁸⁰

「1935 年から 1942 年まで suan chaochuut スアン・チャオチュートのムエタイ場で軍隊がプロモートあするムエタイ興行が行われたが、第二次世界大戦が近くなり消滅した。しかし、ムエタイの人気は絶えることなく、試合は戦時中も、pattanakon パッタナコーン、wongviencyai ウォンウェンヤイ、sriayutaya シーアユタヤの映画館の中などで戦闘機を警戒しながら続けられた。1945 年 Rajadamnunstadium ラジャダムナンスタジアムが設立された。初期の頃は、毎週日曜日の 4 時から 5 時まで試合を行っていた。当時は、屋根がなく簡素な造りであった。このスタジアムは、教育省、体育局の作成した「ムエタイに関する規定 (1937)」に従って作られた。この頃になるとムエタイは職業として成り立つようになり、プロムエタイ選手とムエタイジムが増加し、またスタジアムの職員やレフリーまで職業としてムエタイに関係するようになり始めた。1948 年ラジャダムナンスタジアムは、選手の体重と能力を考慮し、階級を作り始めた。1953 年ラジャダムナンスタジアムは、正式な株式会社として成立した。目的はタイの文化を奨励することであり、ムエタイだけでなく、他のスポーツや音楽まで発表できることを目的とした。ムエタイはこのようにして観衆を集める娯楽、興行として成り立ち始め現在に続いている。」⁸¹

1920 年代にグローブが導入された。それはムエカッチュアクで選手が死亡する事件が起きたからである。グローブを導入して安全化を図ったムエタイは、軍によって慈善授業として興行されるようになっていく。ムエタイは、人気のある娯楽に発展し、観衆を集める

⁷⁹ National Culture Commission 1997, pp48-49

⁸⁰ National Culture Commission 1997, p50 (参考ゴットマイ・パーシアコーン税法 1977 年 p52 を引く)

⁸¹ National Culture Commission 1997, pp48-53

ようになる。こうした動きから賭博をする人々が出現し、賭けに関する法律も作られるようになった。時代が第二次世界大戦前の軍国主義に突入した時期であった。この頃には、軍隊によってムエタイが盛んに行われるようになったのである。1945年には、現在も存続しているラジャダムナンスタジアムが建設され、タイ文化を奨励するためにムエタイ興行が行われるようになった。ラジャダムナンスタジアムは、教育省と体育局が認定するムエタイ・ルールを使用するなどして、ムエタイが単なる娯楽ではなくタイの文化として認められていくようになる。また、スタジアムに属する職員やレフリーも職業として成り立ち始める。

第二項 近代ムエタイの理念

ムエタイがムエカチュアクから近代ムエタイへ移行し、国民的なスポーツへ成長し始めた時代は、ピブーン・ソンクラム首相⁸²がラッタ・ニヨム (Ratta nyom 愛国信条) の文化勅令を出した時代であった。この時代は、タイの国を強い文化的に優れた民族の国であると諸外国にアピールする必要がある、タイは後進国ではないという立場が要請された。文化勅令ラッタ・ニヨムの一つに、国名の変更があった。サヤーム (SIAM 日本はシャムと呼んでいた) から、現在のタイ KINGDOM OF THAILAND に国名が変更されたのである⁸³。ピブーン首相は、この頃、バンコクを中心に多くの中国人が流入することに脅威を覚え、それまでのサヤームの国名ではタイ族の国という意識が希薄になってしまうと危惧し、国名改正を決意するに至った。また、もう一つの理由としては、タイはラーマ5世の頃までは、4つのタイの地域はそれぞれの地域特性が強かったが、北タイ、南タイ、東北タイ、中部タイの全地域を団結して、みなタイであるという結束を強化する必要があった⁸⁴。北部のチェンマイなどは、タイに属する前は、ランナー王国であった。南タイは、イスラミックタイ、タイの南部四県は、現在でもマレーシアと同様のイスラム文化圏であり、第一言語にマレー語を使用している。東北タイのイサン地方は、主要な人口はラオ族が占めてタイ語ではあるが、ラオス語に近い方言が使用される地域である。中部タイのバンコクを中心に位置するタイの中部地域である。これらを民族名によって統合する必要があった。

Vail と Monthienvichienchai は、この頃にムエタイという名称が愛国ムードの中で沸き起きたのではないか、という点に関して以下のように述べている。

Vail は、大同団結運動によって、ロップリー、チャイヤー、コラートといった地域でのタイのボクシングが集約され、かつ、それらの地域特性が誇示される形式で MuayThai と

⁸² 第二次世界大戦中、日本と日タイ同盟を結んだ首相、愛国主義運動など興した。

⁸³ 1939年6月23日 国名変更

⁸⁴ Monthienvichienchai 2004, p41

いう名称が用いられるようになったのではないか⁸⁵、と述べている。また、Monthienvichienchai は「Muay tai (菱田注：タイ族の拳法)」という語に関する限り、17 世紀に中央タイの庶民らの間で使われるようになって発展してきたのではないかと結論づけられているが、むしろ 19 世紀の終盤に生まれたのではないかと言えそうである。しかしながら、Muay-Thai (菱田注：タイ国の拳法) という語は 1939 年に国名が変わってすぐ中部タイの内外で一般的になったと言えよう。」⁸⁶と述べている。

上記のように、Muay-Thai という呼称はこの統一国家主義である大同団結運動によって、できあがったのではないかと考えられるのである。なぜなら、それまでの時代の記録によると、土地の名前を冠してムエロップリー (ロップリー地方の拳法)、ムエコラート (コラート地方の拳法)、ムエチャイヤー (チャイヤー地方の拳法) という名称で呼ばれていたからである⁸⁷。しかし、大同団結運動以降の呼称は、タイで行われている拳法、すなわち MuayThai (タイ拳法) になったのではないかと考えられる。

また、ラッタ・ニヨム以前に Thai が Siam⁸⁸であった頃、ムエサヤーム (シャム拳法) と呼ばれていたという記録が残っていないことから、それまでの時代は、国名を冠した名称が存在しなかったことから判断できる。語源は、ムエは結ぶ、組み合わせ、叩き合う意味する。ムエタイの最古の教本、『タムラームエ』もタムラームエタイ (ムエタイの教科書) というのではなく、タムラームエ (ムエの教科書) であった。

ムエタイ呼称の開始については、これを明らかにする史料を欠いているが、愛国信条のようなナショナリズムがムエタイというタイ国有の格闘技を意味する名称を創りあげたと考えられる。ラジャダムナンスタジアムが、ピブーン・ソンクラム首相の命により政府の政策として建設されたこともその理由の 1 つとなろう⁸⁹。ピブーン首相は、タイ文化を奨励し特に外国人にムエタイを見せるため、ムエタイ競技場の建設を命じたのであった。

これらと同様に、ムエタイ伝説にもナショナリズムが感じさせられる。Vail は、「ムエタイの伝説は深くタイの独自性とナショナリズムに絡み合っている。」⁹⁰と述べている。

以下にあげる二つの伝説は、いつ頃から語り始められるようになったか明らかではないが、タイ人の強さを示すものである。

⁸⁵ Vail 1998,p99

⁸⁶ Monthienvichienchai 2004, p28

⁸⁷ Monthienvichienchai 2004,p22

⁸⁸ Charnvit Kasetsiri 教授は、国名の変更前の Siam や Siamese という名称は、国の統治者か、西洋と国交のあった国で用いられていたが、低社会階級の中では浸透していなかった、と述べている。(Monthienvichienchai 2004,p27)

⁸⁹ Rajadamnerun 2006 ,p70

⁹⁰ Kitiarsa 2003, pp14-15

ナーイ・カノムトムの伝説⁹¹

アユタヤ時代、首都アユタヤが陥落した 1767 年、捕虜としてビルマに連れていかれたシャムの人々の中に多くのタイ拳法の使い手が存在していた。彼らはビルマのカイ・ボン・サム・トンの有力者であるスキ・ブラ・ナーイ・コングによってアンワの町に捕らえられていた。

1774 年⁹²ビルマのラングーンでマンガラというビルマの王が仏陀の遺骨を保存するパゴダをまつる七日七晩の祝祭を開くことを決めた。王はタイ拳法家とビルマ拳法家を闘わせることを命じた。また、祭りではリカイという風俗劇や笑劇や剣闘などが催された。そして拳法の試合は王座の前に設けられた。

祝祭日の初日、ビルマの高位の貴族によってタイ拳法家はビルマの王に紹介された。ビルマ王マンガラはビルマの武術家にビルマ拳法の強さをタイ人に示すように命令した。審判は、アユタヤの武術家を闘技場に上げて紹介した。彼は有名なアユタヤの武術家であるカノムトムであると。その風貌は屈強で浅黒く頑丈に見えた。ビルマ人観衆に混じったタイ人の捕虜もいたが、彼らはナーイカノムイトムを応援した。

そしてすぐ、相手のビルマ拳法家が決まったのでカノムトムはビルマ拳法家の周りを踊りだした。それは不思議な光景でビルマの観衆は何をしているのか、わからなかった。審判はすぐ「これはタイの伝統で、どの拳法家も師匠に尊敬を奉げるためのワイクルーである」と説明した。

試合を始める合図が出されるとすぐナーイ・カノムトムは猛攻撃し肘や拳で相手の胸を打ち倒してしまった。しかし審判は、ビルマ人拳法家は、ワイクルーの踊りによって心を乱してしまったのだから、タイ拳法家の勝利には、できないと判定を下した。そこでナーイ・カノムトムは、更に 9 人のビルマ人拳法家と試合をしなければならないことになった。この判定は、タイ人拳法家達にナーイ・カノムトムのあだを討つためにナーイ・カノムトムと一緒に闘うという気持ちを生じさせた。ナーイ・カノムトムは、タイ拳法の優越性をおとしめないために、ビルマの拳法家と闘うことを同意した。彼の最後の試合はヤカイと言う町から祭りに来ているビルマ拳法の師範であった。しかし、彼もすぐに蹴りで打ちのめされてしまった。もはや彼を恐れ、挑む人間はいなかった。

こうして、マンガラ王はタイ拳法、ムエタイに魅せられ、カノムトムを呼び、褒美を与えると言った。彼は金銭か美しい妻とどちらが良いかと聞かれた。カノムトムは、躊躇う事もなく美しい妻がほしいと答えた。彼は「金銭を得るのは難しくありません。得難いのは美しい妻です。」と答えた。マンガラ王は彼に二人のモン族のビルマ女性を与えた。そして彼はタイへその妻たちを連れて帰り、生涯一緒に暮らしたという。

以上のエピソードについて、彼を称える次のような伝承が今も残っている

これらは他の拳法にはない。

⁹¹ Kraitus1988, p22

⁹² 1770 年 3 月 17 日と記述されている書物もある。(Channarong Suhongsa 1983,p2)

タイ人のものだ。
指、膝、足、肘すべて使った。
そして拳士はどんなに体が小さくとも打たれない。
9人のビルマのモン族はムエタイによって打ち負かされた。
その名はナーイ・カノムトム、名声が轟く。
たとえ、彼が亡くなっても、その名は残る。
私たち後で生まれた者も皆、知っている。
彼は民族の誇りを保った。
そして、私たちは皆、彼を褒め称える。

二人のフランス人兄弟を倒したタイの軍人⁹³

ラタナコンシン時代になり、ラーマ1世⁹⁴の御世になって7年目の1778年の話である。
フランス人のボクサーである兄弟がチャオブラヤー川を旅し、幾つかの街を訪ね、土地のボクサーに賞金を賭けて闘いを挑んでいたという。彼らはまだ負けたことがなく、強い相手を探していた。

彼らがラタナコンシン⁹⁵を訪れた時、彼らは通訳を通じて地元の名士にラタナコンシンで一番強い男と金を賭けて闘わせてもらいたいと申し出た。

話を聞いた名士はラーマ1世に申し出た。申し出を聞いたラーマ1世は、王の弟とこの件について相談するために、次のような文章を送った。「外国人が挑戦してきたからには相手となる者を探しだすことができなかつたら、それは大いなる恥となるであろう。王都のどこにも挑戦を受けることができる者がいなかったと言われよう。我々の名誉は地に落ちてしまう。不名誉は外国にまで広がってしまうであろう。必ずやめざましく相手を打ち負かすことのできるタイ拳法家を見つけ出すことを願う。」王は弟の助言を容れて当時には法外な4000パーツの賭け試合を行う旨を名士を通じてフランス人兄弟に伝えさせた。

王の弟は対戦相手に当時の国防省でレスリング（当時のタイ式相撲のようなものと考えられる⁹⁶。）の指導をしていたムエン・プランと言う人物を探し出した。この男はムエタイとレスリングの両方の知識があるタイ拳法の師範であった。彼は力の強い選手で、また技術も非常に優れていた。王の弟はエメラルド寺院の西の劇場の傍に試合場を建設するように命じた。約束の日、ムエタイ選手は簡単に勝ってしまい二人のフランス人は大恥じを掻いてしまったという。

⁹³ Kraitus 1988, p23

⁹⁴ 初代バンコク王朝 1782 年即位、

⁹⁵ 現在の首都バンコクの事

⁹⁶ 2000.9.18 Chulalongkorn 大学にて Chuchai Gomaratut 准教授へのインタビュー。

これは最初に外国人が挑戦した試合とされ、東南アジア諸地域が欧米列強の植民化におびえる東南アジアで唯一独立を維持していたタイ国民に勇気を与えたであろうエピソードとして伝わっている。上にあげたムエタイの伝承は、すべて外国人に対してタイ人の強さを示したという物語であり、話が真実であったかどうかは分からない。しかし、これらの伝承からは、強いナショナリズムが感じられる。これらは、タイ人に対して西欧列強をはじめ、外国人に対して劣等でないことをタイ国民に抱かせる目的が感じられる逸話である。こうした逸話は、タイ人の勇猛果敢さを示し、タイ人が強い民族であるということを国民に意識させる物語として伝承してきたといえる。

また、ムエタイは、タイがナショナリズムのムードに包まれていた時期に、ムエタイは近代スポーツとして生まれ変わった。この頃、ラジャダムナンスタジアムは、当時のピブーン首相によって建設されている。ピブーン首相は、ラジャダムナンスタジアムをタイの文化を外国人にも見せるために建設したのである⁹⁷。この建設の目的は、タイの国家を軍事国家とするために強い戦士を必要とし、タイ人の勇猛さを諸外国にアピールする必要があったのである。Monthienvichienchai は、「当時のタイは、イタリアのファシズム、ドイツ、特に日本のイデオロギーをタイの政治に取り込んでいた。」⁹⁸と述べている。ピブーン首相は、親日派であり、日タイ同盟を締結した人物であり、戦後に日本に亡命して人生を終えている。

また、その時代のタイが日本に親日感情を抱いていたことを示すタイ研究に、村嶋英治『現代アジアの肖像 9 ピブーン』1996 には、以下のことが述べられている。

「チャクリー王朝六代目の絶対君主ワチラーウット王（在位 1920～1925）は、革命の陰謀を弾圧後、青年将校の反論を新聞紙上に次のように発表した。立憲制を導入したから日本が発展したのではない。天皇への忠誠心の強さが日本の成功の原因である。タイ国王は人民の父であり、遅れた人民をリードしてきた。これまで通り国王の指導に忠実に従えば、タイにも発展の可能性があるのだ。新渡戸稲造の『武士道』を引用しながら国王は自分への忠誠を求めた。」⁹⁹とある。この時代の為政者は、タイの政治やシステムに、日本的イデオロギーを取り入れようとしていたと考えられる。さらに、Dort によれば、「ラーマ 6 世（菱田注：ワチラーウット王）は、タイの若者に軍事教育を行うためのムエタイの主催者であった。彼は、ボーイスカウトとワイルドタイガー¹⁰⁰を設立し、そこでムエタイの訓練を行った。1921 年ラーマ 6 世は、バンコクのスワンクラブカレッジにボクシングの最初のスタジアムを設立した。こうして、ムエタイは健康増進、護身術、娯楽、武術の手段であり、国民の誇りのために発展してきたのである。」¹⁰¹と述べている。

⁹⁷ Rajadamunun 2006,p70

⁹⁸ Monthienvichienchai 2004 ,p40

⁹⁹ 村嶋 1996,はじめに V

¹⁰⁰ ワイルドタイガー（スア・パー）は、軍事訓練を受けた民間人、公務員である。

¹⁰¹ Dort 2004 ,p15

ワチラーウット王の後に続いて、強い愛国主義を打ち出したピブーン首相は、「男は国家の垣根であり、女は国家の花である」とスローガンを提唱した¹⁰²。彼によって創られたラジャダムナンスタジアムには、もちろん女性がリングに上がることは許されない。おそらく、ラジャダムナンスタジアムの前に存在したスワンクラブカレッジやラックムアンでも女性は、リングに上がることはできなかったと考えられる。なぜなら、このスワンクラブカレッジは、西洋のエリート男子校をモデルにしており、ラックムアンなどのスタジアムも、ムエタイをタイの文化として外国人に見せていたため、ナショナリズムの強いこの時代には、ムエタイ興行に女性が参加することが許されなかったと考えられる。

しかしながら、トンブリ時代に詠まれた詩の中では、女性は、積極的にムエタイに参戦しており、男性に匹敵するほどの演武が見られた¹⁰³。と記述されている。また、National Culture Commission 1997 によれば、ラタナコーシン時代初期（ラーマ 2 世の頃）には、女性のムエタイが行われていたという記録¹⁰⁴が残されているため、ナショナリズムが到来するまでの時代は、女性のムエタイが盛んに行われていたと推測することができる。

このような文脈から Monthienvichienchai は、「ラーマ 6 世統治下であった初のナショナリズムの時代に、女性のムエタイ参入が制限されたのではないかと考えられる。というのは、この時代に起こった経済の近代化によって、過酷なナショナリズムと密接に関連した中産階級の性差別政策がもたらされ、それによって女性のムエタイ参入に影響が及ぼされた」と推測できるからである。しかしながら一方で、西洋の影響下にあったこの近代化の時期以前に、すでにタイ社会は家父長制が根強く浸透していたとする見方もあり、女性のムエタイ参入に制限がなされた正確な時代に関しては、まだ議論の余地があるだろう。」¹⁰⁵と述べている。

以上のように、ナショナリズムと女性のムエタイ参入の制限は、何らかの関連があると考えられるが、その根拠は明らかにされていない。しかしながら、タイのナショナリズム時代が終焉したと言われる時代¹⁰⁶になると、女性のムエタイが見られるようになった¹⁰⁷。これは、ナショナリズムにおける「ムエタイは男性が行なうものである」という観念が薄れてきたことを示している、と考えられる。

また、宗教的な見地から、女性のムエタイを垣間見ると、女性を不浄のものとして考える観念を継承するムエタイのジムは多く存在した。筆者のフィールドワークしたゲオサムリットジム¹⁰⁸では、女性の練習への参加どころか、練習場のサンドバックに観光客の女性

¹⁰² Monthienvichienchai 2004 ,p50

¹⁰³ Monthienvichienchai 2004, p45

¹⁰⁴ National Culture Commission 1997,p29

¹⁰⁵ Monthienvichienchai 2004, pp45-47

¹⁰⁶ 2006.8.13 タイ政治の研究者、村嶋英治は 1970 年代の共産主義の脅威に触れるまでタイはナショナリズム時代であったと指摘する。

¹⁰⁷ Stockmann 1979 ,p20

¹⁰⁸ ゲオサムリットジムのオーナーはチェンマイ出身である

が触れることさえ拒んでいた。しかしながら、東北タイを始め、バンコクに点在するムエタイのほとんどのジムは女性のリングへの入場を認めており、村祭りなどの野外特設リングでは、男性選手の試合の終わった後であるが、女性選手が男性と同じリングで試合を行っていた。これらのように女性を不浄のものとして考える観念は、地方やジムのオーナーの宗教観によって違いが見られる。

ビッグショットジムのコーソーン会長は、「女性がジムに入ることは悪くない、しかし、スタジアムのリングは、高い所に造られているので、月経のある女性が男の人より高い位置になることが良くないことである」と説明した。

ランシットスタジアムは、女性のムエタイ興行をプロデュースする団体である。このスタジアムは、ムエタイ・インスティテュートというムエタイの振興の為に作られた団体であり、外国人への指導の他にバンコク・アジア大会でムエタイがデモンストレーション競技で公開された時に、オリンピックへの展望の為に造られた組織である。このランシットスタジアムでは、女性のリングと男性のリングを分けて設置している。これらの理由は、古くから慣習にのっとり、男性のリングで不吉なことが起きない為の配慮であるという。しかし、男性の選手は、女性のリングへの入場は問題なく、女性のリングで共に練習している。一方、女性が男性のリングに入ることは絶対に許されない。これは、一般にタイ仏教が持っている、「女性の月経が不浄であり、男性の霊的な力を弱める」といったものと同様な観念である。このように、ムエタイを宗教的な見地から見るとムエタイは、女性を忌み嫌っているようにもとらえられる。

これらの要素を含めて、近代ムエタイは、タイがナショナリズム高揚政策をしていた時代に誕生しているために、タイ人の独自性を求めるものであったり、男らしさの象徴であったり、タイ人の強さを求めるものであったと言える。

第三項 国民的なスポーツとしての理念

近代化したムエタイは、タイ全土にラジャダムナンスタジアムとルンピニースタジアムをモデルにタイ全土に普及し、タイの各地で行われるようになった。地方のムエタイ選手は、強くなると金銭と名声を求めバンコクへやってくるようになる。ムエタイのヒーローは、タイ国民のヒーローになり大スターを生み出すようになる。メディア、スポンサーの支持がタイのムエタイを急速に成長させたのである。タイの大きな産業の一つに観光産業があるが、外国からの観光客は、1960 年頃から急速に増え始める。その頃、日本から国際式ボクシングのプロモートに来た野口修プロモーターは、日本でムエタイを模倣して創ったキックボクシングを売り出すと爆発的な人気を得るようになり、ムエタイは、その元祖として世界に伝播していく。タイ国内の各地では、ランキング委員会やタイトル認定組織が創られるようになる。各地で強者として知られると中央の両スタジアムに集められる。地方ムエタイが登竜門であり、中央がその舞台となってきた。ラジャダムナン・ルンピニースタジアムのチャンピオンは、タイのヒーローとして国民的なスターとなっていく。ムエタイのチャンピオンと言え、タイを代表するようなスターであったのだ。最初に国民的なヒーローになったのは、スグ・プラヒンピーマイである。彼は、ムエタイの草創期を代表する選手として有名である。Vail によれば、彼は身体にナックレーン（俠客）を示す刺青を入れた風貌で人気があった。彼は、殺人の罪で 27 歳から 12 年間服役するが（8 年 9 ヶ月という説もある）出所後ムエタイ選手として頭角を現し、41 歳まで現役を続ける。（44 歳と言う説もある）引退後コラート県のある村の村長になり、生涯を終える事になる¹⁰⁹。

次に、アピデット・シットヒランが有名である。彼はムエタイの帝王と呼ばれ、60 歳を超えた現在でもムエタイジムのトレーナーとして若手選手の育成を努めている。彼の現役当時は、スタジアムに人が入れないほどの人気を誇り、彼の試合が放送されると街には人がいなくなるほど人気を博していたと言う。ムエタイ選手で国王から国民栄誉賞（スポーツ部門）を受賞したのは、シリモンコン・ルークシリパットである。彼は、ムエタイ選手で最初に国民栄誉賞を受賞した選手である。彼らのようなタイを代表するようなムエタイ選手が活躍していた頃は、1950 年代～1970 年代中期までである。

しかしながら、現在のムエタイ選手は、MVP を取ろうが何階級も制覇しようが国王から表彰されるようなことはない。また、ムエタイギャンブラー以外のタイ国民にその存在は知られほどのスター選手は存在していない。上記の時代をムエタイの黄金期として捉えるスポーツ記者やプロモーターも多い。先にあげた、スグ、アピデット、シリモンコン達が活躍した時代は、ムエタイの観客がギャンブラーではなく、ホワイトカラーからブルカラーのタイ国民を含め多くのタイ国民が彼らの支持者であった。当時の彼らの名声は、タイ国民なら誰でも知っていると言うほどの大スターであったのである。

¹⁰⁹ Vail 1998, pp112-113

国民的なスポーツへ成長したムエタイは、現在のようなギャンブラーばかりに支持されているスポーツではなく、国民の全体に支持されていたのである。この時代のムエタイ選手は、プロ格闘技として、国民的なヒーローでなければならず、強く、勇ましくあるべきという理念を持っていたと見られる。

第四項 近代ムエタイ草創期の技法（1920 年頃～1940 年頃）

National Culture Commission（1997）より

「1929 年ルンピニー公園の中に新しいムエタイ場が建設された。サナーンムエスワンサヌックと言って中には遊園地のような観覧車などもあるレジャーランドのような競技場であった。ムエタイのリングは布が使われリングロープは 3 本使われるのが基本になった。国際式ボクシングと同じようになったのである。この頃からムエタイは、赤コーナーと青コーナーを設けるようになり、レフリーやタイムキーパー、ベル係り、試合は 3 ラウンドか、6 ラウンドで闘われていた。賞金は、勝者に 400 バーツ、敗者に 300 バーツ払われた。引き分けは 350 バーツ両方に払われた。」¹¹⁰

近代ムエタイの草創期には、判定決着が少なかったか、もしくは全くなかったと推測される。なぜなら、ムエタイを行なう選手とレフリーの技術が未熟であり、勝敗を決定する能力が不足しているためである。また、観客側も判定決着では勝者の確定ができないからである。この頃のムエタイに良く似た事例に、現在マレーシアで行われているトモイ（Tomoi）がある。（第一章、第一節、第一項参照）トモイは、マレーシアのムエタイと呼ばれる格闘技でムエタイと同様にグローブを着用し、ムエタイとよく似たルールで行われているが、このトモイは、お祭りのためのイベント的な格闘技であり、職業として成り立っているわけではなく技術的なレベルはムエタイとは比べ物にならないほど低かった。トモイは、判定決着はまったくなく、すべての勝敗は、KO か TKO で決定され、これらが無ければすべて引き分けになるように決められている。トモイでは、ギャンブラーも存在していなかったため、勝敗を明確にする必要性はない上、エンターテインメント的な要素が強いため、勝敗にはこだわらない試合も含まれる。一般客も KO がない場合はすべて引き分けであると認識している¹¹¹。

近代ムエタイ草創期のムエタイは、ルールブックは残されていないため、トモイの例のように、ムエカッチュアクからグローブへの移行期には、相手が倒れないと引き分けにさ

¹¹⁰ National Culture Commission 1997, p50.（参考ギラームエ 1975.2.10 p8 を引く）

¹¹¹ TMOI（トモイ）マレーシア式のムエタイ風格闘技、ギャンブルは、禁止されている。2006.3.26 マレーシア コタバルで調査。

れていた可能性が高い。したがって、この時代も倒すための技法が多用されていたと考えられる。なぜなら、ムエカッチュアクの時代からタイ全国の強者が地方から中央へ集められて闘うようになっていたのが継続していたからである。そのため現在のムエタイよりも勝敗にこだわったムエタイが行われていたと見ることができ、この時代も倒すために技法が磨かれていたと考えられる。なぜなら、KO 決着ならば勝敗が明確になるために、相手を仕留めるための技法、すなわち倒すための技法が最も求められていたと考えられる。

第五項 国民的なムエタイへの変容期の技法（1940 年頃～1970 年頃）

ラジャダムナンスタジアムが建設され近代ルールの制定がされた頃から様々な国民的なスターを生み出した。筆者がムエタイ関係者（雑誌記者、プロモーター）に行なった聞き取り調査によると、この時代はムエタイの黄金時代であり、国民的な大スターを生み出している時代である。この時代は、スタジアムの観光客はギャンブルをする人よりも格闘技の愛好者が多かったとみられる時代である。

本項では、この時代のムエタイ関係者なら誰もが知るような時代を象徴する名選手の技法から、技法の変容を考察する。また、同時に選手には、個性があり対戦相手や体調により、どの選手にも共通する技法ではないが、選手の出した攻撃を分類することによって技法の変容を考察する。そのために、手からの攻撃（パンチ、肘打ちなど）と足からの攻撃（前蹴り、廻し蹴り、膝蹴りなどを含むすべての蹴り）の確実に相手に当たった数を数える方法を取る。現在に残る映像資料などから全体を捉えることは困難であるが、当時の試合の概要を窺うことはできると考えられるためこの方法を用いた。

資料『ムエタイ名勝負大全集』日本スポーツ映像株式会社より

興行日不明 『アピデット・シットヒラン対ラウィーデーチャーチャイ』

ラウィーデーチャーチャイは、手の攻撃が 33 回、足による攻撃が 5 回であり、蹴りがほとんどできなかった。(Fig32)

1967 年 12 月 6 日 『アピデット・シットヒラン対ラウィーデーチャーチャイ』

アピデットは、手から 18 回、足から 57 回の攻撃をしていた。手が 1 として蹴りが約 3 倍である。ラウィーデーチャーチャイは、手から 80 回、足から 22 回の攻撃であった。(Fig33)

1969 年 7 月 24 日 『ブットローレック対タノンチットスコータイ』

ブットローレックは、手から 50 回、足から 124 回の攻撃をしていた。手による攻撃の約 3 倍の足の攻撃であった。(Fig 34)

これらの試合の例を見ると手による攻撃（パンチや肘打ち）に対して、足による攻撃（蹴り）多くても1:3であった。この時代の選手には、対戦相手と膝蹴りの攻防をしている時間はあまりにみられなく、離れて打ち合っている時間が多い。レフリーも数秒組み合うとすぐに両者を引き離し、打ち合いがないと両者に積極的に攻めさせていた。

この時代の選手に話を聞くと、タマサート大学のムエタイ講師のデン師範は、「私は、39歳（1974）まで試合をしましたが、今とは激しさが違います。ラジャダムナンができた頃には、一年に七人の死者が出た時の事を憶えています。判定勝ちなんてものはめったになく、最後までやったらどちらもボロボロになっていました。」¹¹²と言った。彼の記憶が曖昧で大げさであるかもしれないが、ムエタイ・インスティテュートのアムヌエイ校長も当時のムエタイを「ラジャダムナンスタジアムができた頃は、ほとんどの試合がノックアウトで終わっていました。まだ、守る技術がないのと選手が相手を倒さなければ、勝ちではないと思っていました。」¹¹³と言った。

これらに加えて、外国人ジャーナリスト Hardy Stockmann によれば、「1971年の2月から4月までに三人の選手が試合のノックアウトが原因で死亡し1966年から1967年の一年間で6人のムエタイ選手が試合の後遺症で翌日に亡くなり、タイ国中では見積もると3ヶ月か4ヶ月に一人のムエタイ選手がムエタイの試合で亡くなった¹¹⁴」と述べている。

これらは、ムエタイの試合が相手を倒すことを目的に行われていたためと、試合の安全管理をするレフリーのダメージの判断基準が未熟であったためであると考えられる。この時代の過激なムエタイは、学者や有識者が協議し、ムエタイの安全性を高めねばならないとの世論が沸き起こった¹¹⁵。

なお、この頃日本では、ムエタイから創られたキックボクシングが盛んに興行されるようになり、沢村忠と言う選手が人気を博していた¹¹⁶。沢村忠の後輩として日本ヘビー級、東洋ミドル級チャンピオンであった藤本勲氏は、この頃のムエタイを「現在とは圧倒的に、一発一発のパンチや蹴りの威力が強く、体格の大きい選手がたくさんいて、どちらの選手も倒しあうために必死で試合をしていた。」と語る。また、選手の技については、「パンチの選手は、パンチだけ、膝蹴りの選手は膝蹴りだけ、肘が得意な選手は肘打ちばかりを試合で使っていた。」と言う。また、「この頃、ジムには得意技の特徴が見られ、膝蹴りのジム廻し蹴りのジムなどというように選手の特徴がジムによって激しく違いが見られた。」¹¹⁷と語る。

¹¹² 2007.8.16 デン師範 タマサート大学 72 歳

¹¹³ 2007.8.17 アムヌエイ校長 ムエタイインスティテュート 73 歳

¹¹⁴ Stockmann 1979,p12

¹¹⁵ チュラロンコン大学 スポーツ学部 准教授 Chachai 教授の御教示による。

¹¹⁶ 加部 2001

¹¹⁷ 2006.10.27 前目黒ジム会長 日本プロスポーツ大賞 功労賞（1969年・1985年）

この頃のムエタイ選手は、スタジアムで兄弟子の闘う姿を見る以外は、ムエタイの試合での技法を視覚することができなかった。まだテレビがバンコクでも一般家庭に少なかった頃である。すなわちジムで練習する強い選手がムエタイの手本であり、ジムによって技の特徴が見られたと考えられる。

これらのように国民的なスポーツへ変容期に活躍したムエタイ選手が繰り広げる試合の技法の分類は、上半身からの攻撃（パンチ）に対して下半身からの攻撃（キック）は、上記の例を見るとおおよそ 1 : 3 である。現在のムエタイの技法と比較すると圧倒的に上半身からの攻撃の比率と下半身からの比率で下半身（キック）が少ないのが分かる。上半身からの攻撃（パンチや肘打ち）が多いと言うことは、接近戦で打ち合っていたという事である。接近戦で打ち合うからノックアウトが多く、この時代の選手の言葉にあるように試合では激しく打ち合っていたというのが窺える。



Fig.32 ラウイー・デーチャーチャイの攻撃パターン

（往年の名選手に名を連ねるラウイー・デーチャーチャイ¹¹⁸も当時の攻撃パターンは、パンチが主な攻撃で、蹴り技はローキックがほとんどであった。蹴り技はパンチの 5 分の 1 程度しか出していなかった。）

¹¹⁸ラウイー・デーチャーチャイは、1964 年に極真空手の元最高師範代であった黒崎健時氏と闘い勝利している。『蘇る伝説大山道場読本』日本スポーツ出版社 2000.1.4



Fig.33 パンチの攻防

(ラウイー・デーチャーチャイとアピデット・シットヒラン。アピデットの攻撃は、パンチとキックの割合が、1:3 であった。)



Fig.34 フットローレックのミドルキック

(彼の攻撃もパンチとキックの割合が、約 1:3 であった。)